台大日本語文研究第 31 期
2016 年 6 月，頁 1-29
2016-03-21 收稿，2016-05-12 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2016.31.1

城市、舊習、犯罪
—閱讀〈龍山寺的曹老人〉系列戰後三作品—

河尻和也*

摘要

1936 年台北帝國大學新設解剖學教室，金關丈夫應聘就任為教授；並在此解剖學教室開始針對臺灣各個民族展開相關調查研究。1941 年金關以筆名林熊生在《臺灣警察時報》發表了偵探小說〈船中的殺人〉；並於 1943 年開始陸續發表以臺灣人素人偵探為主角的偵探小說「龍山寺的曹老人」系列作品。這系列作品之後或出版為小說集或被編入精選輯發行。同期間金關與池田敏雄等人共同創刊《民俗臺灣》致力於蒐集、記錄臺灣傳統文化、風俗民情。本論文以金關的偵探小說中生動地描寫著台灣人主角的「龍山寺的曹老人」系列後期作品為中心進行考察，探討各作品中所謂的「娛樂性」及其「後殖民」意義所在。

臺灣大學學術期刊資料庫

關鍵詞：金關丈夫、林熊生、龍山寺的曹老人

* 虎尾科技大學應用外語系助理教授

City, Old Customs, and Crimes -Reading Three of the Post-WWII Old *Mr. So at Ryuzan-Temple* Series

Kawajiri, Kazuya*

Abstract

Taipei Imperial University had newly-established the anatomy laboratory since 1936, and Kanaseki Takeo took up the position as a professor. He started to study and conduct investigations for Taiwan ethnic groups in the anatomy laboratory. Kanaseki Takeo also used pseudonym, Lin, Hsiung-Sheng to publish the detective fiction *Murdering on the Boa*t on the *Taiwan Police Newspaper*. He had published a series work of *Old Mr. So at Ryuzan-Temple* which adopted a Taiwanese ordinary detective as the main character since 1943. The series of works had been edited as a collection of novels or special edition in publishing. During the period, Kanaseki Takeo and Ikeda Toshio created the *Folk Customs in Taiwan* together to survey and record the Taiwan traditional culture and local customs. The paper is to explore of Kanaseki Takeo's Post-WWII *Old Mr. So at Ryuzan-Temple* Series from the perspectives of "entertainment" and "post-colonialism."

Keywords: Kanaseki Takeo, Lin, Hsiung-Sheng, *Old Mr. So at Ryuzan-Temple*

臺灣大學學術期刊資料庫

* Assistant Professor of the Department of Applied Foreign Languages, National Formosa University

都市、旧慣、犯罪
「龍山寺の曹老人」シリーズ戦後の三作品を対象に

河尻和也*

要旨

1936 年、金関丈夫は新設された台北帝国大解剖学教室に教授として就任した。同大学で金関は、台湾の諸民族に関する調査・研究を行った。そして 1941 年になると林熊生名義で探偵小説「船中の殺人」を『台湾警察時報』に発表、1943 年には、台湾人素人探偵曹老人を主人公とする探偵小説を発表した。これらの作品は後に、単行本として出版された。他にも同時期に金関丈夫は池田敏雄らとともに『民俗臺灣』を創刊、台湾の伝統文化の収集・記録に尽力している。本稿では、曹老人が活躍する様子を描いた「龍山寺の曹老人」シリーズの中でも、戦後の三作品を中心に分析を行い、作品が持つ「娯楽性」および、戦後的意味を考える。

キーワード：金関丈夫、林熊生、龍山寺の曹老人

臺灣大學學術期刊資料庫

* 虎尾科技大學應用外語系助理教授

都市、旧慣、犯罪
「龍山寺の曹老人」シリーズ戦後の三作品を対象に

河尻和也

一、はじめに

1936 年、日本統治時代の台湾、台北帝国大学（以下台北帝大）に医学部解剖学教室が新設された。同年、金関丈夫（1897-1983）は新設された同大解剖学教室に教授として就任した。金関は台北帝大で台湾の諸民族に関する調査・研究を行い、時には警察に協力し骨格鑑定の仕事も行った。また、戦後も 1949 年迄、中華民国政府の要請により国立台湾大学（もと台北帝大）に残り研究を続けた[1]。

金関は台北帝大における調査・研究活動の傍ら、1941 年、林熊生名義で探偵小説「船中の殺人」を『台湾警察時報』に発表している。その後、金関は林熊生、蘇文石名義で雑誌に数篇の小説を掲載し、後にそれらはまとめられて単行本として出版された。金関は、随筆「考古學的小説」（1943）の中で「一體に、之に限らず不完全の斷片より全豹を推理する多くの探偵小説の方法は、考古學的であると云つていゝ」（p.205）と述べている[2]。金関の専門は解剖学であるのだが、骨を鑑定し、それが「本島人」か「内地人」[3]までも見分けたという彼が、科学的・論理的推理により犯人を導き出す探偵小説の執筆を行ったことは興味深い[4]。また同時期、金関は池田敏雄らとも

臺灣大學學術期刊資料庫

---

1 金関丈夫の略歴については、中島利郎「日本統治期台湾の探偵小説」（中島利郎編『日本植民地文学精選集 38 船中の殺人／龍山寺の曹老人　第一輯・第二輯』、東京：ゆまに書房、2001 年）pp.1-7、坂野徹『帝国日本と人類学：1884-1952 年』（東京：勁草書房、2005 年、pp.261-262）などを参考とした。

2 金関丈夫「考古学的小説」（中島利郎編『日本統治期台湾文学集成 17 台湾随筆集（三）』、東京：緑蔭書房、2003 年）。

3 本論文で内地とは日本統治時代の日本「内地」を指す。また「内地人」とは「日本人」を指す。本島人と記した場合、特別な記述が無い限り、日本統治時代の台湾に住む漢人を指す。

4 星名宏修「萬華と犯罪－林熊生「指紋」をめぐって」（王徳威ほか『帝国主義と文学』、東京：研文出版、2010 年、pp.355-356）、江間常吉「白骨事件」（『台湾探偵実話』: 台北、日本出版配給株式会社台湾支店、1943 年）などを参考とした。

に『民俗臺灣』の創刊にかかわり、台湾の伝統文化の収集・記録に尽力している。本論文では、台湾人素人探偵の曹老人が活躍する様子を描いた「龍山寺の曹老人」シリーズの中でも、戦後に発表された三作品を中心に分析を行う[5]。

二、「龍山寺の曹老人」シリーズ、先行研究、研究目的について

金関丈夫の探偵小説の中で、曹老人が登場する作品は七篇に上るが、その中で戦前に雑誌発表された作品はわずか三篇（「許夫人の金環」（「信心深い泥棒のこと」）、「光と闇」、「入船荘事件」）に留まる。以上の三篇はまず『台湾公論』に掲載され、戦後間もない台湾で出版された『龍山寺の曹老人　第一輯』（1945 年 11 月）に収録された。また同年 12 月には『龍山寺の曹老人　第二輯』（「幽靈屋敷」、「百貨店の曹老人」を収録）が、そして 1947 年 1 月には『龍山寺の曹老人　第三輯』（「謎の男」、「観音利生記」の二篇を収録）が、やはり台湾で発表されている。ちなみに、金関自身は 1980 年に出版した創作集『南の風』の「あとがき」において、「龍山寺の曹老人」シリーズに言及し「敗戦後の台湾で本土との交通もとだえた時、読み物に飢えていた当時の人々のため」（p.416）に執筆したと述べている。しかしながらそれは金関の記憶違いであり、少なくとも『第一輯』収録分の三篇は戦前に書かれた作品である。また『第二輯』収録作品の初出は不明であるが、単行本の出版時期から考えるならば､恐らく 1944 年から敗戦までの期間に書かれた可能性が高い。ここで、これまでに『龍山寺の曹老人』を扱かった先行研究について簡単に言及したい。中島利郎（以下敬称略）は、金関丈夫が林熊生という台湾人とまがう筆名を用い、台湾人の曹老人を主人公とした探偵小説を執筆した理由を、台湾人の読者に身近に

臺灣大學學術期刊資料庫

[5] 本稿で用いる『龍山寺の曹老人』のテクストについて､「観音利生記」は（金関丈夫『南の風』、東京：法政大学出版局、1980 年）収録の作品に、それ以外の作品は、前掲（中島利郎編『日本植民地文学精選集 38 船中の殺人／龍山寺の曹老人　第一輯・第二輯』、2001 年）収録の作品にもとづく。また引用する際のページ数もこれらテクストに従う。

感じてもらうためだと指摘する。そして中島は、金関が娯楽に飢えた台湾の読者や「産業戦士」に対し、知的で興味深く、時局に対する「慰安」として読める娯楽小説を提供したと述べている[6]。また、浦谷一弘は「龍山寺の曹老人」シリーズの分析から、金関の作品が持つ「教育」的側面を指摘する[7]。そして浦谷は、その「教育」的側面が、時代を経るにつれ総督府よりの文脈に沿った「教育」から、漢民族よりの「教育」へと変化していったと指摘する。それに対して横路啓子は、初期作品に総督府よりの「教育」「道徳」的側面が見られる理由を、その発表媒体が時局的な記事を多く載せた『台湾公論』だったことにあると指摘する。また横路は浦谷と同様、後期作品において、漢民族的倫理観が描かれるようになったと述べている[8]。当点について基本的には筆者も同意であるが、後期作品における漢民族的倫理観に関して、さらに考察を深めることができるのではないかと考える。

また金関の創作活動に対してではなく、彼が関わった雑誌『民俗臺灣』と彼の思想に関する研究も行われている。川村湊、小熊英二、坂野徹らは、金関が主催した『民俗臺灣』という雑誌が、皇民化政策に対して部分的な抵抗を見せながらも、大枠においては皇民化に役立てる事を念頭において出版されていたと批判する[9]。対して三尾裕子は、金関は台湾統治そのものを否定しておらず、さらに『民俗臺灣』の成果が日本の植民地統治に役立たせることができるとも述べていたが、しかしながらそれは、日本人の統治に資するためとい

臺灣大學學術期刊資料庫

6 中島利郎「日本統治期台湾探偵小説史稿」（中島利郎編『台湾探偵小説集』、東京：緑蔭書房、2002 年）p.390。

7 浦谷一弘「植民地統治期〈台湾〉の探偵小説―林熊生『龍山寺の曹老人』」（『花園大学国文学論究』（32）、京都：花園学園大学、2004 年）pp.57-89。

8 横路啓子「植民地台湾的探偵小説からの逸脱―金関丈夫「龍山寺の曹老人」シリーズを中心に」（東アジアと同時代日本語文学フォーラム×光来大学校 GLOBAL 日本研究院編『跨境』笠間書院、2015 年）。他にも横路の論文では、植民地台湾の探偵小説のコンテクストにおける推理作家としての金関丈夫の特殊性などが分析されている pp.49-59。

9 川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』（東京：講談社、1996 年）、小熊英二「金関丈夫と『民俗台湾』－民俗調査と優生政策－」（『近代日本の他者像と自画像』東京：柏書房、2001 年）pp.24-53、前掲、坂野徹『帝国日本と人類学：1884 年―1952 年』（2005 年）。

うよりは、台湾人の側に立ち台湾人の現実を無視した植民地政策―皇民化―を批判するためであった、と指摘する[10]。

本論文では、以上の先行研究をふまえた上で、金関丈夫の「龍山寺の曹老人」シリーズの中でも、台湾の旧慣、漢民族的道徳観への言及が多く見られる『第二輯』『第三輯』に収録された作品の分析を行う。本論文ではこれら作品を、その作品構造、時代背景、台北の都市空間、台湾の旧慣との関連から分析を行いたい。そして、金関の作品に描かれた「娯楽」性がいかなる性質のものなのか、後期の作品において台湾の旧慣が描かれることの意味、これら作品が戦後に発表されたことが持つ意義を明らかにすることをその目的とする。

三、素人探偵曹老人

『龍山寺の曹老人』の物語は、主に台北の伝統的な「本島人」街、萬華がその舞台となっている。当シリーズの舞台が主に萬華であることについては、星名宏修が金関の探偵小説「指紋」を分析した論文で指摘しているように、萬華が伝統的な「本島人」街であり、当時の「内地人」にとって犯罪や下層社会をイメージさせる空間であったことによると考えられる[11]。ここでまず「龍山寺の曹老人」シリーズに素人探偵として登場する、曹老人というキャラクターについて考えてゆく。

金関丈夫は、曹老人という人物について、「許老人の金環」(1943)で次のように描いている。

> 曹老人の素性は誰も知らない。曹老人はいつでも龍山寺の堂の片隅の椅子に腰をかけて、長い煙筒で煙草をのみながら、參詣人をぼんやりと眺めてゐる。曹老人がいつ頃からそこに座つてゐるかそれも誰も知らない。萬華の人々は、自分の古い記憶

[10] 三尾裕子「植民地下の「グレーゾーン」における「異質化の語り」の可能性」(『アジア・アフリカ言語文化研究』(71)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2006 年) pp.181-203。
[11] 前掲、星名宏修「萬華と犯罪－林熊生「指紋」をめぐって」(王徳威ほか『帝国主義と文学』2010 年) pp.346-350。

臺灣大學學術期刊資料庫

をいくら前まで遡つて見ても、そこには曹老人が悠然と座つてゐる[12]。

曹老人は素性がはっきりとせず、特別な職業についている訳ではないが、過去には投劔術を学んだことや林本源家の宝石の管理人をしたことがある[13]。普段は龍山寺の椅子に座っており、見た目は平凡な老人達と別に変わったところはない、よぼよぼで「何か新らしい事件でも起らなければ曹老人はやがて人々の視野から消えてしまふだらう」（p.21）といった人物である[14]。また横路が述べるように『第二輯』以降の曹老人は、時に龍山寺を離れ自ら行動する探偵と変化しているが[15]、基本的な外見、性格に大きな変化は見られない。

このような外見・性格にもかかわらず、曹老人は字も読めるし、籤詩の意味も判る。さらに、自分や身内の者の病気の手当てを知りに来た人々に、病人の様態や年齢、体質を尋ね、飲ませる薬を教えることができる。このように、金関により曹老人は外見は平凡であるが、教養があり、かつ医学的な知識を備えた「文明人」としての一面を持った人物として設定されている。一方で曹老人は投劔術に長けており、「入船荘事件」（1941）では、犯人の心理から犯行の様子を読み取り、「わしならば、あゝ深くは打ち込まないよ。女がうんと反つた拍子に、劍が床の上にぽろりと落ちる、その程度でも人は殺せるぞ」（p.66）とも述べる。またさらに事件解決のためには台湾の催眠術「關三姑」を行うこともある[16]。つまり曹老人は、善良な一般市民であり教養や医学的知識がある「文明人」である一方で、

[12] 林熊生「許老人の金環」（前掲、中島利郎篇『日本植民地文学精選集 38』2001 年）p.5。
[13] 資産家。林本源とは板橋林家の屋号。
[14] 林熊生「光と闇」（前掲、中島利郎篇『日本植民地文学精選集 38』2001 年）。
[15] 前掲、横路啓子「植民地台湾的探偵小説からの逸脱―金関丈夫「龍山寺の曹老人」シリーズを中心に」（『跨境』、2015 年）p.54。
[16]「關三姑」とは一種の催眠術であり、霊媒によって陰府へ導かれ、亡者と会ったり、あるいは運命を占ったり、病気の原因を占ったりする。池田敏雄によれば「民度の向上と共にかう云ふ巫術は追々民衆の心から離れ、今では僅かに稀に限られた家で行はれるに過ぎない」ということである。「幽靈屋敷」において、曹老人は事件解決の為、当術を利用する。池田敏雄「關三姑」（『民俗臺灣』（第一巻第三号）、台北：東都書籍、1941 年、pp.22-24）を参考にした。

臺灣大學學術期刊資料庫

犯罪者の心理や台湾の旧慣にも詳しく投劾術ができる。笠井潔が述べているように、探偵とは市民社会とその外部の接点に身をおき、二つの世界を媒介するキャラクターである[17]。探偵は推理において謎を解明し、危険極まりない〈外部性〉の内部化、〈凶暴な力〉の制度的な回収に努める。そのため素人探偵である曹老人も、時に犯罪者の暴力に対抗し、秩序を回復させるため、科学的・文化的知識の他にも、法の外、制度外の知識・技術を有しているとも言える。

当論文では、まず曹老人が「本島人」街である萬華の龍山寺を離れて、「城内」で活躍する「百貨店の曹老人」の分析を行いたい。その後で、龍山寺や台湾の旧慣に関する重要な言及がある「幽靈屋敷」と「観音利生記」の分析を行う[18]。

四、「百貨店の曹老人」について

「百貨店の曹老人」は、戦後間もない 1945 年 12 月に『龍山寺の曹老人　第二輯』中の一篇として発表された。「百貨店の曹老人」が特徴的なのは、いつも龍山寺の堂の椅子に腰掛けている曹老人が萬華を離れ、中心部「城内」へと赴き、そこで事件を解決する物語だということである。

当物語の時代背景は 1942 年から 1945 年の間であると考えられる[19]。当時、台北市役所が出版していた『台北市統計書』によれば、1940 年に入ると台北市の人口が既に 35 万人を超していたことがわかる[20]。ヴァルター・ベンヤミンは、「探偵小説の根源的な社会的内容は、大都市群衆のなかで個人の痕跡が消されることである」(p.225)と述べている[21]。そして正に「百貨店の曹老人」では、大都市台北

臺灣大學學術期刊資料庫

[17] 笠井潔『探偵小説論序説』(東京：光文社、2002 年、p.70) を参考とした。
[18] 紙幅の関係上、「謎の男」に関する分析は稿を改めたい。
[19] 作中で「蘭印時代のチョコレート」(p.40) という言及がある。このことから考えれば、当作品の時代背景は、すでにインドネシアにおいて日本による軍政統治が始まっている 1942 年以降であると考えられる。
[20] 台北市役所「戸口」(『台北市統計書』台北：台北市役所、1943 年) p.9。
[21] ヴァルター・ベンヤミン著、浅井健二郎編訳『批評の瞬間：ベンヤミンコレクション (4)』(東京：ちくま学芸文庫 2007 年)。

の百貨店鈴本の「超特別の雑踏」(p.40) の中に身を隠し犯行を行う犯人を、曹老人が発見して事件を解決する。

（一）まなざしの空間

「百貨店の曹老人」の冒頭部では、陳警官の誘いによって、曹老人が龍山寺を離れ、台北の中心部ともいえる「城内」の百貨店鈴本へと足を運ぶ様子が描かれている。ここで登場する「大百貨店」(p.39) 鈴本とは、恐らく 1932 年に台湾初の百貨店として台北市栄町に出店された菊元百貨店をモデルとしていると考えられる。ちなみに、菊元百貨店は 6 階建て（後の 7 階建てに改築）であり、百貨店鈴本も同じく 6 階建として設定されている[22]。

当物語において百貨店鈴本の 4 階では、時局に関するある展覧会が開催されている。というのは、ジャカルタで百貨店を経営することとなった鈴本の息子が、当地のある部族の家宝を手に入れ、「サラセン風の豪奢な布」(p.42) や、「繊細な浮き彫りある象牙の小箱」(p.42)、「絢爛を極めた數々の樂器」(p.42) といった南国情緒溢れる、エキゾチックな品々を展示しているからである。金関は百貨店鈴本における展示会について次のように書いている。

> 所謂客寄せの催しではない、世人の南方認識に貢獻しようと云ふ、云はば時局的な催しなのである[23]。

実際に、太平洋戦争が始まって間もない 1942 年初頭、日本軍は石油資源獲得のために蘭印（オランダ領インドネシア）へと進撃した。そして同年 3 月、インドネシアは日本軍により三地域に分割されて、統治されることとなった。当時、日本軍による軍政が敷かれ、インドネシアにおいても日本語の普及政策が行われることとなったのである[24]。ちなみに当時、ジャワ島各地にはチヨダという百貨店がオープンしている[25]。

---

[22] 菊元の食堂が 5 階にあるのに対して、百貨店鈴本の食堂は 6 階と設定されている。菊元百貨店に関して、陳柔縉『台灣西方文明初體驗』、台北：麥田出版社（2005 年）を参考とした。

[23] 林熊生「百貨店の曹老人」（前掲、中島利郎篇『日本植民地文学精選集 38』2001 年）p.40。

[24] 宮脇弘幸、百瀬侑子「南方占領地における日本語普及と日本語教育：日本軍

臺灣大學學術期刊資料庫

吉見俊哉は博覧会に関する論稿の中で、博覧会と百貨店、そして展覧会の共通性を指摘している[26]。その共通性とは、そこに分類・展示された商品／品物が、観客／客に、「見る」という「まなざしの経験」を与えてくれることである。つまり博覧会同様、百貨店や展覧会で展示された品々を、観客が「見る」ことにより、彼らはその中から「現代性」が何なのかを学ぶことができる。そして、当物語において、百貨店鈴本の展示会場に展示されているインドネシアの品々とは、日本軍の南方進出により獲得された「宝」を現していると言うことができる。つまり、百貨店鈴本を訪れた客は、展示された「宝」を「見る／消費する」ことを通して、日本の近代化＝領土拡大を肯定的に「学ぶ」こととなる。

ちなみに、金関により陳警官が曹老人をつれて、鈴本に向かった目的は「この時局展を見せようと云ふのでは」（p.40）なく、曹老人に蘭印時代のチョコレートをかけたアイスクリームを食べさせたいというものであった。しかしながら物語では、その「南方発展の象徴」であるともいえる「ジャワのルビー」（王冠の飾り石）が、何者かの手によって盗まれてしまうのである。これは何を意味するのであろうか。

（二）大稲埕、エキゾチシズムの空間

「百貨店の曹老人」において、「ジャワのルビー」を盗んだ犯人は、金関により大稲埕の大橋町に住む二人組みの女であると設定されている。清朝末期、艋舺（後の萬華）は台湾北部の最大の商業都市であり、大稲埕は艋舺付近の小さな村と呼ばれていた。しかしながら、鉄道の敷設後、淡水と艋舺の繁栄は大稲埕へと移った。そして日本統治時代になると、すでに萬華の反映は過去のものとなり、大稲埕の永楽町、太平町などが「本島人」の商業の中心区となる[27]。

占領下フィリピンとインドネシアの場合（1942－1945）」（『成蹊文藝』（130）、東京：成蹊大学、1990 年）p.77。

[25] 川端基夫「戦前・戦中期における百貨店の海外進出とその要因」（『経営学論集』（49）東京：龍谷大学、2009 年）p.8。

[26] 吉見俊哉『博覧会の政治学』（東京：中公新書、1992 年）p.159。

[27] 顔忠賢『日據時期大稲埕店屋空間的文化形成分析』（台北：国立台湾大学修

臺灣大學學術期刊資料庫

また日本統治時代、大稲埕は萬華と同様に「本島人」の街であり、さらにこの空間は、「城内」を「明」とするならば「闇」の部分を代表していた。

> 凡ての大都市の繁栄の裏にその對蹠的なる暗黒面があるものだ。そしてこの島の都もその例に洩れないことは勿論だが特にそれは大稲埕に集中してゐるかの観がある。貧しき者必ずしも悪人ではない。けれども殆ど凡ての犯罪や不道徳が貧乏に基因することは事實である。竊盗、密淫賣、賭博、幼兒虐待、阿片密飲等々々、併し警察以外の民衆は之等には無關心に大稲埕は明け暮れて行くのである[28]。

顔杏如は日本統治時代の内地人の生活を研究する中で、高橋鏡子『女性に映じたる蓬萊ヶ島』（1933）を参考に、大稲埕が「内地人」にとっては「異国情緒」（エキゾチズム）溢れる空間であったことを指摘している[29]。そして当時の台湾人も、大稲埕の雰囲気を「ああ、ここは何處かに似てゐる。南洋の雜踏や異國の妖しき銅鑼の音」（p.46）と、南洋のエキゾチズムと関連させて書き残している[30]。

ちなみに犯人の女二人組みが住む大橋町とは、大稲埕の中でも「本島人」が一番多く住む空間であり[31]、さらに言えば大稲埕の中で、最も要保護世帯が多く住む空間でもあった[32]。恐らく、金関が犯人

臺灣大學學術期刊資料庫

士論文、1990 年、p.48）を参考とした。

[28] 螺溪生、蘆山生「大稲埕の裏街のぞ記」（『社会事業の友』（75）、台北：臺灣社會事業協會、1935 年）p.107。

[29] 顔杏如『植民地都市台北における日本人の生活文化-「空間と「時間」における移植、変容』（東京：東京大学博士論文、2010 年）p.134。

[30] 吳瀛濤「祝宴・藝妲・廣場」（『文藝台灣』第四巻第二号、台北：啓文社、1942 年）。

[31] 前掲、台北市役所「戸口」（『台北市統計書』1943 年）p.8。1943 年の統計を見ると、大橋町に住んでいる住人は 12814 人であり、うち「内地人」は 26 人（8 戸）、「本島人」は 12212 人（2337 戸）、中華民国人は 575 人（136 戸）であり、その他外国人が 1 人（1 戸）とある。同じく大稲埕にある永楽町、太平町、日新町などと比べても、大橋町は「内地人」に対する「本島人」の割合が非常に多い地域である（約 1：470）。

[32] 臺北市社會課「凡例」（『要保護者の生活調査ー方面別社會調査ー』、台北：臺北市社會課、1935 年）。大稲埕では、大橋町の要保護世帯の数が 91 世帯と最も多い。

の住居を大稲埕大橋町としたのには、当空間の持つ以上のようなイメージによるものだと考えられる[33]。

（三）取り戻される「宝」

物語の中で、女たちに盗まれた「ジャワのルビー」は、曹老人によって取り戻される。この「ジャワのルビー」とは、日本（台湾）にとっては「異質なもの」、つまりエキゾチシズムを表す記号でもある。そして、それはまた日本帝国主義拡張の記号（「宝」）でもあった。

そして、この「ジャワのルビー」を奪う犯罪者、彼女らが住む空間とは、「文明国家」日本／台湾が内に抱え込む「異質な空間」であったとも言える。そのため、彼女らに宝石が奪われるという状況は、近代都市台湾の「外部」（大稲埕）から進入した「闇」、つまりは台北自らが内に抱え込む「闇」によって、その「中心」である「城内」から「宝」が奪われ、安定した社会が混乱するという状況を表していると言える。そしてその「宝」は曹老人によって取り返される。

そのため、この物語をその構造から見れば、次のように考えることができる。つまり、インドネシアという「外部」（かつ帝国拡大の象徴）よりもたらされた「宝」が、植民地台湾内に存在する「異質」な「外部」に住む犯罪者によって奪われ、探偵である曹老人により再度、取り返されて「中心」へと戻る。つまりこの物語において読者は、曹老人の行動を通して、「宝」を獲得するという冒険を追体験しているのだと言えよう。そして、その「宝」が取り戻されることにより、混乱した社会は回復し、人々は束の間の「安心」を得るのである。

先述したように、この物語が発表されたのは戦後である。恐らく読者はすでにその中から、「帝国の拡大」を欲望することはなかった

[33] 金関丈夫の小説「南の風」（1942-1943）においても大稲埕は、物語の重要な舞台として登場する。その中で金関は、大橋町に住む元名妓月霞を登場させ、エキゾチシズム溢れる空間として描いている。また、金関は同小説で「内地人」が比較的多い太平町では、カフェーで交流を行う「内地人」と「本島人」知識人の交流を描くなど、大稲埕の各空間とその特徴、そこでいかなる人々が活動をしていたのかを書き分けている。

臺灣大學學術期刊資料庫

であろう。金関は「読み物に飢えていた当時の人々のため」に作品を発表したと述べた。確かに当物語は「娯楽」作品である。一方で、当作品は日本統治の「過去」を描いており、さらに読み方によっては、既に「過去」ではあるが植民地主義の肯定を書いている作品だとも捉えることができる。当時、金関自身はこの作品に意図的に日本の植民地統治を肯定する要素をもたせたとは考えていなかったのかもしれない。しかしながら、横路も述べるように「余技」として執筆していた文芸作品であるからこそ、金関自身の無防備な意識――例えばここでは「過去」の植民地統治に対する肯定――を読み取ることができると言えよう[34]。次にやはり同時期に発表された「幽靈屋敷」について分析を行いたい。

五、「幽靈屋敷」を読む

「幽靈屋敷」は、「百貨店の曹老人」と同様、1945 年 12 月に単行本『龍山寺の曹老人　第二輯』中の一篇として発表された。当物語でも、基本的に素人探偵曹老人が捜査を行い、事件は解決し一時的に混乱していた社会秩序は回復する。まずは当作品の構造から物語を考えてみたい。

（一）「幽靈屋敷」の構造

「幽靈屋敷」を一読してわかること、それはこの作品で金関が「過去と現在」、「迷信と科学」といったものを、明確に書き分けているということである。物語の冒頭で、陳警官が曹老人に萬華の「入船町の川端」（p.5）にあるという幽靈屋敷に関する話を持ち出す。以前、その屋敷には貿易商の王勤家族が住んでいたが、ある時強盗に襲われて一家は皆殺しになった。その後、屋敷には幽霊が出るという噂が広まり、誰も住み着かなくなる。陳警官の話を聞いた曹老人は次のように回想する。

[34] 横路啓子は、金関の文芸作品から無防備な「人種意識」や日本人としての意識が表出しているのではないだろうか、と述べている。前掲、横路啓子「植民地台湾的探偵小説からの逸脱―金関丈夫「龍山寺の曹老人」シリーズを中心に」（『跨境』、2015 年）p.49。

臺灣大學學術期刊資料庫

何でも、誰かゞ幽靈を見ると、數日中に必ず家の中に死人が出るといふ噂だつた。今どきはもうそんなことを信じる者もないだらうが、まだ十五六年前までは、さうした世の中だつたね。今とは世間がすつかり違つてゐたからね[35]。

金関丈夫が林熊生の筆名で、曹老人の作品の発表を開始したのが、1943 年 8 月である。そのため王家の屋敷で殺人事件が起こり、幽霊の噂があった 15～6 年前とは、物語中の時間から考えて恐らく 1920 年代中頃から 1930 年迄の期間を指していると考えられる。ちなみに、1930 年の台湾はすでに近代化を果たし、1935 年 10 月には日本の植民地統治の「成功」を内外に知らしめるための、台湾施政 40 周年記念博覧会が開催された。つまり「幽靈屋敷」の物語中の「現在」（1940 年代）とは、近代化を成し遂げた後の台湾だと言える。そのため、陳警官から王家の屋敷の話を聞いた堂守の范さんは、感慨深く「お茶を注ぐ手をやすめて、古い思い出に心がゆすられる」（p.6）のである。このように物語の冒頭では、「幽霊」や「迷信」という現象が、すでに「過去」の思い出の中に存在するものとして示されている。

次に、この物語に登場する人物について考えてみたい。被害者である葉風濤は、金関により内地の大学を出て、弁護士をしている台湾人と設定されている。葉風濤は友人鄭其昌の妹、翠香と婚約をしている。ちなみに、鄭其昌は医者である。二人の職業からもわかるように、彼ら二人は台湾人の知識人である。葉風濤は結婚後に翠香と住む為、王家の幽靈屋敷を購入しようと考えていた。

葉風濤らが修理が終わった屋敷の前で写真を撮ると、彼の左側に人の形をした黒い影が映っていることが発覚する。その後、屋敷の二階に上がった葉風濤がバルコニーから落ちて死亡する。ここに至り、それまで「幽靈屋敷」や「心霊写真」を「迷信」として信じて

[35] 林熊生「幽靈屋敷」（前掲、中島利郎篇『日本植民地文学精選集 38』、2001 年）p.6。

臺灣大學學術期刊資料庫

いなかった「科學的教養のある」（p.8）鄭其昌も、葉風濤の死と、王家の幽靈屋敷とをつなげて考えるようになる。

以上のように小説「幽靈屋敷」において、葉風濤と鄭其昌の二人は「近代」、「文化」、「文明」を表す記号として、そして「幽靈屋敷」、「心霊写真」は「過去」、「非文明」、「迷信」を表す記号として登場している。「幽靈屋敷」の物語では、その後、曹老人の科学的・論理的推理により「心霊写真」が、フィルムの二重焼きを利用したものであること、さらに物的証拠である衣服のボタンが発見され、葉風濤の死も、翠香の元婚約者孫依川による殺人事件だったことが判明する。

つまり「幽靈屋敷」の構造とは、「過去」に信じられていた王家に関する「迷信」が、1940 年代の「現在」の台湾において、曹老人の科学的知識・推理により解決する物語であると言える。しかしながらこの物語で特徴的なのは、曹老人が事件解決のために「關三姑」という台湾の「迷信」を利用している点である。ちなみに池田敏雄は、金関が主催する『民俗臺灣』の 1 巻 3 号において随筆「關三姑」（1941 年）を発表し、次のように述べている。

> 關三姑とは一種の催眠術で、靈媒によつて陰府へ導かれ、亡者と會つたり、あるひは自己の正氣を見て運命を占つたり、病氣の原因をたしかめたりするのである。（中略）民度の向上と共にかう云ふ巫術は追々民衆の心から離れ、今では僅かに稀に限られた家で行はれるに過ぎない[36]。

事件の解決の過程で曹老人は「關三姑」を用いるが、もともとは犯行を暴く為、翠香に術にかかったふりをするよう芝居をさせていたにすぎなかった。しかしながら、物語の最後では文明と科学の進歩により、「迷信」であると信じられていたはずの「關三姑」が、あたかも存在しているかのように描かれる。

[36] 池田敏雄「關三姑」（『民俗臺灣』（第一巻第三号）、台北：東都書籍、1941 年）pp.22-24。

臺灣大學學術期刊資料庫

また「幽靈屋敷」の中で、金関丈夫は「關三姑」が曹老人によって行われる場面で「不思議なことには、關三姑は警察で禁止してゐるに拘らず陳警官は別にとめようとはしない」（p.29）と書いている。物語の「現在」において「關三姑」が禁止されている理由は、それが皇民化政策における「迷信・陋習の打破」に違反しているからだと考えられる。それでは、この物語で曹老人によって「關三姑」が行われること、そして結末でそれが本当に起こったかのように描かれていることとは、いかなる意味を持つであろうか。次に金関の台湾の旧慣に対する態度を確認する為、金関が主催した『民俗臺灣』に言及したい。

（二）「回帰」する「過去」

金関丈夫が、総督府情報部に嘱託として勤め、民俗調査を行っていた池田敏雄の誘いを受け『民俗臺灣』を創刊したのが 1941 年である。金関らは当雑誌発刊に際して、各方面に「趣意書」を配布したが、その中には当雑誌がいかなる目的によって発刊されたかが記されている[37]。金関らによる「趣意書」によれば『民俗臺灣』創刊の目的を、次のようにまとめることができるだろう。

> 台湾本島人の皇民化は是非とも促進せしめなければならない。そのためには、本島旧来の陋習弊風が速やかに打破せられて、島民が近代文化の恩恵をより多く享受することは歓迎すべきことである。と同時に、一面に於いて、弊害のない旧習がその犠牲になり湮滅しても仕方がないことである。また、記載及び研究の能力のある文明国民には、あらゆる現象を記録し、研究すべき義務が有る。そして、それを記録し、研究することは南方に国力を伸展しようというにあたり、最も提携の機会の必要性の多い「支那民族」を理解する上で重要である。

[37] もともと「趣意書」は、雑誌発刊の際に配布された資料であるが、後に「趣意書」に対する楊雲萍の反論「研究と愛」、さらに金関による再反論「民俗への愛」とともに、（『民俗臺灣』（第一巻第二号）、台北：東都書籍、1941 年、pp.42-45）に掲載されている。

臺灣大學學術期刊資料庫

金関の「趣意書」に対しては、これまで様々な議論がなされてきた。先行研究でも述べられているように、筆者も金関が日本の植民地統治に直接反対していた訳ではないが、ヒューマニストであり人種的偏見の少ない人物であったことに同意である[38]。金関による「趣意書」からは、「皇民化」により「島民」が、「近代文明の恩恵」を享受し、彼らが迷信や弊習から解放され「文明化」されることを「歓迎すべきこと」だと考えていたことがわかる。三尾裕子は、雑誌『民俗臺灣』の分析から、金関らが皇民化政策による台湾の旧習打破に対し、「文明化」と矛盾しない改変であればそれを許容し、合理性の無い徒な旧習打破を「皇民化」の暴力として否定していたと述べている[39]。三尾の見解に対して、基本的には筆者も同意である。

これまでに見たように、「關三姑」という台湾の旧慣は、「幽靈屋敷」という作品においては、「現在」や「文明」に対立するもの、つまりは「過去」や「迷信」に属するものとして描かれていた。そして、それは恐らく池田も述べるように、学者である金関にとっても失われつつある、非合理的な台湾の旧慣であっただろうと考えられる。

金関は「趣意書」の中で「既に記載及び研究の能力ある文明國民には、有らゆる現象を記録し、研究すべき義務がある」（p.42）と述べている[40]。そして金関のこの言及は、台湾に対する愛情により、皇民化の暴力から合理的な旧慣を守ろうという彼の心情を表している一方で、植民者の側に属する学者としての金関の旧慣に対する「保存・記録」といった冷徹な目――統治者としての被統治者へのオリエンタリズム、が存在していたことをも意味している[41]。

臺灣大學學術期刊資料庫

[38] 前掲、坂野徹『帝国日本と人類学：1884-1952 年』（2005 年）pp.262-263。
[39] 前掲、三尾裕子「植民地下の「グレーゾーン」における「異質化の語り」の可能性」（『アジア・アフリカ言語文化研究』（71）、2006 年）p.195。
[40] 金関丈夫「論争の始末（上）」（『民俗臺灣』（第一巻第二号）、台北：東都書籍、1941 年）pp.42-43。
[41] ここで言うオリエンタリズムとは、自分たちが西洋と同等であるとし、他の「東洋」よりも優れていると考え、それにもとづいて行動を行う、日本型の

また、レナート・ロサルドは植民地の支配者である植民者、帝国主義の執行者たち（役人、警察官、伝道師、人類学者）が、当地の文化を自分自身で変化しておきながら、それが消滅したことを悼むという状況を「帝国主義ノスタルジア」と定義した。「帝国主義ノスタルジア」においては、進歩へと向かい変化し続ける世界において、変化しないとされる「野蛮」な社会が、文明化されたアイデンティティを規定する安定した基準点となる。その中で、「人々」は新しいものを評価すると同時に、より安定した世界（植民地の「過去」や旧慣など）に憧れるのである。そして、文明化の過程により生活形態が変化すると、異文化の様々な変化を、個人的な喪失のように経験する[42]。

これまでに「幽靈屋敷」を物語の構造から見てきたが、金関により曹老人の科学的・論理的捜査が強調され書き込まれた後、結末部分で「現在」の台湾で突如登場する「過去」の「迷信」――「關三姑」とは、ともすれば「帝国主義ノスタルジア」という概念につながる可能性を有していると言えるのではないか。つまり、近代化した「現在」の中で描かれる「關三姑」とは、統治者としてのオリエンタリズムの他にも、近代化した社会において失われつつある、金関の台湾の「過去」に対するノスタルジーを表しているのではないだろうか。

臺灣大學學術期刊資料庫

六、「観音利生記」について

「観音利生記」は『龍山寺の曹老人』の中でも最も遅い 1947 年 1 月に『龍山寺の曹老人　第三輯』中の一篇として発表された。ちなみに当作品が発表された翌月、台湾では 228 事件が発生している。当物語は、他の曹老人の物語と違い、所謂、探偵小説とは異なる形式・内容を持っている。萬華に住む女性銀は、媳婦仔制度によって、

オリエンタリズムを指す。

[42] レナート・ロサルド著、椎名美智訳『文化と真実』（東京：日本エディタースクール出版部、1998 年 pp.105－106）を参考とした。

息子の将来の嫁として玉兒を迎え入れ養ってきた[43]。しかし、息子が病死し、玉兒の息子の嫁としての意義がなくなる。そのため、銀は玉兒を 200 円で、男に売りに出そうとするのである。首を吊って自殺をしようとする玉兒を発見した曹老人は、龍山寺の観音様の力を借りて、銀を諭し改心させる。

このような当物語の構造を、探偵小説として考えるならば、加害者は銀であり、被害者は玉兒であるとも言える。しかしながら、当時の時代背景や、『民俗臺灣』の特集「養女・媳婦仔制度再検討」の内容を参考に考えるならば[44]、この物語の「犯人」というのは、1940 年代の社会で問題となっていた「媳婦仔」という旧慣であり、「被害者」とは媳婦仔制度で苦しんでいた当時の女性たちであると考えることができる。

先行研究の中で「観音利生記」に言及したものに、浦谷一弘の「植民地統治期〈台湾〉の探偵小説」がある[45]。浦谷は論文の中で、当物語を曹老人シリーズの初期作品「許夫人の金環」（1943）と比較している。「許夫人の金環」で曹老人は許夫人に対して、盗まれた金環が取り戻された際には、それを売って政府の「事變の公債」(p.12)を買うよう観音様に誓うよう諭す。また、当作品では、日本語の 50 音が事件の暗号を解くカギとなっている。浦谷は当作品における曹老人の許夫人に対する言動、そして暗号に 50 音が使用されていることを、総督府の文脈による「教育」であるととらえている。対して「観音利生記」で曹老人は、玉兒を売りに出そうとする銀に対して、玉兒を売りに出さないよう諭し、それを観音様に誓わせる。浦谷はそれを漢民族よりの教育であるとし、「シリーズ当初は総督府の文

臺灣大學學術期刊資料庫

[43] 銀の家は明確に記されていないものの、曹老人が自宅から龍山寺に向かう途中で、玉兒を見つけていることから、萬華区であると考えられる

[44] 1943 年 11 月、『民俗臺灣』第三巻第十一号において「養女・媳婦仔制度再検討」という特集が組まれた。

[45] 前掲、浦谷一弘「植民地統治期〈台湾〉の探偵小説―林熊生『龍山寺の曹老人』」(『花園大学国文学論究』(32)、2004 年)。

脈に寄り添った〈教育〉であったが、次第に〈漢民族〉よりの〈教育〉へと移行してゆくのだ」（p.81）と指摘する[46]。

確かに「観音利生記」では、「許夫人の金環」とは異なり、銀は観音様や風水などを理由に「媳婦仔」がもたらした結果を反省し改心する。そしてそれは一見、皇民化政策期に行われた「迷信や陋習の打破」、「寺廟整理」とは相反する関係にあるように見える[47]。それでは、具体的に金関丈夫は「媳婦仔制度」をいかに捉えていただろうか。

（一）『民俗臺灣』における媳婦仔制度の検討

金関丈夫の主催する『民俗臺灣』では、1943 年 11 月号において、「養女・媳婦仔制度再検討」と銘打った特集が組まれた。関係論文は 14 本にのぼるが、そのうち 11 本が台湾人による執筆である。『民族台湾』誌上で、媳婦仔制度が再検討された理由は、当制度の持つ人身売買的側面が問題となっていたからである。

媳婦仔制度とは、もともと成人男性が成人女性を迎え入れる場合、聘金や結婚の費用が高くかかることから始められた制度であった[48]。また、池田敏雄が「台北市艋舺に於ける媳婦仔制度・養女制度」で述べているように、台湾北部における媳婦仔制度は、中南部におけるそれとは異なっていた。というのは、艋舺（および台湾北部）における「媳婦仔」という言葉は「養女」をも含んでいたからである[49]。つまり、「媳婦仔」とは言っても、必ずしも将来の自分の息子の嫁として幼女を貰い受ける訳ではなく、成長後、女中や妓女として働

臺灣大學學術期刊資料庫

46 同上。

47 皇民化政策の内容には、初等教育の徹底、日本語教育の常用、漢文欄の廃止、寺廟の整理、迷信、陋習の打破、改姓名などが挙げられる。近藤正巳『総力戦と台湾－日本植民地崩壊の研究』（東京：刀水書房、1996 年）を参考とした。

48 媳婦仔では息子の将来の嫁として、生後生まれて間もない幼女を貰い入れるのが一般である。この場合、養子縁組は無償で行われることが多かったが、幼女の実父母が利益を得るために、お金を受け取り娘を媳婦仔に出すこともあった。その場合、女児の将来は保証されず、生家も異議を申し立てることはできなかった。池田敏雄「台北市艋舺に於ける媳婦仔制度・養女制度」（『民俗臺灣』（第三巻第十一号）、東京：東都書籍、1943 年、pp.12-15）を参考とした。

49 前掲、池田敏雄「台北市艋舺に於ける媳婦仔制度・養女制度」、1943 年。

きに出す為に、この制度が使われることがあった。陳惠雯は、大稲埕における女性の仕事や生活を分析しているが、清代の台北にはすでに僅かな金で養女（媳婦仔）を買うという制度が存在したと述べている[50]。また李騰嶽によれば、1940 年代の大稲埕で働く妓女 105 名の内、92 名が養女（媳婦仔を含む）であった[51]。

こういった当時の状況を受けて、張文環は「老娼撲滅論」（1943）で台湾北部における「媳婦仔制度」を、皇民化運動と関連させて次のように批判している。

> 殊に大稲埕に於ける媳婦仔の生活やその背後は國民精神作興の妨害者であり、皇民運動のがんである。そのため臺灣に於けるわるい意味の媳婦仔制度は大いに再檢討してもらひたいと思ふのである[52]。

張文環は、同文において媳婦仔の全てを否定している訳ではなく、その制度の持つ人身売買的側面を批判している。実際に張文環は小説「藝妲の家」（1941）の中で、幼い頃に媳婦仔として売られ、大稲埕の妓楼で働く女性采雲の悲劇を描いている[53]。金関は「観音利生記」の中で、曹老人に「あの男の手で南部へやられて、賤しい稼業をさせたれた娘はたくさんある。地獄というのはそのことじゃよ」（p.237）と語らせる。この「南部にやられる」とは、張文環が「藝妲の家」で書いているように、南部に行って妓女になり資金を稼いだ上で、北部に戻って仕事を続けるのが、1940 年代当時の「臺北の藝妲の殆どが辿つてゐる道」（p.57）だったからである。このことからも、金関丈夫が「媳婦仔制度」や、そして妓女の実態を理解していたことをうかがえよう。恐らく戦後、当物語を読んだ台湾人読者も、以上の背景を理解していたと考えられる。

臺灣大學學術期刊資料庫

---

[50] 陳惠雯『查某人地圖』、台北：博揚文化、1999 年。
[51] 李騰嶽「媳婦仔と養女」（『民俗臺灣』（第三巻第十二号）、台北：東都書籍、1943 年、pp.16-17。
[52] 張文環「老娼撲滅論」（『民俗臺灣』（第三巻第十一号）、台北： 東都書籍、1943 年、p.35。
[53] 張文環「藝妲の家」（『臺灣文藝』（創刊号）、台北：啓文社、1941 年）。

（二）「過去」へのノスタルジー

「幽靈屋敷」の分析でも見たように、日本統治時代の金関は、皇民化政策による台湾の旧習打破に対して、「文明化」と矛盾しない改変であればそれを許容し、合理性の無い徒な旧習打破を「皇民化」の暴力として否定していた。そのことから考えば「養女・媳婦仔制度再検討」で、張文環が述べていたように「媳婦仔」といった悪しき旧慣が無くなること自体に、金関は基本的に反対をしていなかったことがわかる。つまり「観音利生記」のもうひとつの「犯人」である、「媳婦仔」という習慣が、曹老人によって批判され、改善されることは、金関が戦前において考えていた「皇民化」、つまりは「文明化」としての旧慣の合理的な打破とは矛盾していない。なぜならば、この旧慣は 1940 年代の台湾でも依然として島民を苦しめていたからである。

一方で金関らは、「寺廟整理」など台湾人の文化や心を理解しない、急進的な「皇民化」には反対をしていた。池田が述べるように「傳統を無視したゞ徒らに全ての舊慣を打破することのみを以て生活改善だと考へるが如き無責任なる態度」（p.48）に、基本的に金関らは反対をしていたのである[54]。そのため、曹老人が観音様の力を借りて、玉兒を助けるという物語とは、漢民族よりの「教育」というよりも、金関自身の「皇民化」に対する批判に沿った物語と言うことができる。恐らく「観音利生記」という作品は、発表時期から考えて戦後に描かれたものであろうと推察される。一方で、作品に描かれた台湾の旧慣「媳婦仔」に対する態度は、戦前の金関の態度とほぼ変化が無いと言っていい。

先述したように、「観音利生記」が発表されたのは、228 事件の起こる直前の 1947 年 1 月である。管本康之は「探偵小説、群衆、マルクス主義－平林初之輔の探偵小説論」の中で、読者は探偵小説を

[54] T・I（池田敏雄）「編輯後記」（『民俗臺灣』（第一巻第三号）、台北：東都書籍、1941 年、pp.271-272）、および、前掲（坂野徹『帝国日本と人類学：1884-1952 年』2005 年）を参考とした。

臺灣大學學術期刊資料庫

読むことにより、自分たちを不安に陥れ、恐怖させるものが何であるかを解読でき、それらを支配することができる、と述べている[55]。「観音利生記」について言えば、読者を不安に陥れ、恐怖させるものとは、台湾の旧慣「媳婦仔」だと言えるだろう。そしてそれは、日本統治時代、現実の上でも金関らにより『民俗臺灣』誌上で否定されていた。

このように「観音利生記」に描かれた、読者の不安や恐怖である媳婦仔制度とは、日本統治時代の台湾で問題となった不安・恐怖であり、それは物語の中で曽老人によって解決され、社会の秩序は元に戻る。このような、曽老人の手により秩序が回復される当物語とは、読者に対して、ある種の「安定した」日本統治時代という「過去」へのノスタルジーを提供するものであったのではないだろうか[56]。なぜならば、当時の台湾人読者にとっての不安や恐れとは、「媳婦仔」という台湾の旧慣ではなく、目の前に存在する戦後初期台湾の社会的、政治的混乱にあったと考えられるからである。

このように見れば金関が戦後に出版した『龍山寺の曹老人』の物語とは、読み物に飢えた読者に対する「娯楽」である一方で、「過去」に存在し、かつ現在（戦後初期）においても、ノスタルジックに想起することができる思い出や、ある種の「過去」への憧れを提供した作品であるとも言える。そしてそれは、戦後初期の台湾においても存在し続ける日本の植民地経験、つまりはポストコロニアル的状況を表しているとも言えるのはないだろうか。

臺灣大學學術期刊資料庫

---

[55] 管本康之「探偵小説、群衆、マルクス主義―平林初之輔の探偵小説論」『日本近代文学』（第 59 集）日本近代文学会、1998 年 pp.78-79。

[56] F.デーヴィスは、ノスタルジアについて、「現在もしくは差し迫った状況に対するなんらかの否定的な感情を背景にして、生きられた過去を肯定的な響きでもって呼び起こす」（p.27）ものであると述べている。ちなみに、F.デーヴィスはノスタルジアを、素朴なノスタルジア、内省的ノスタルジア、解釈されたノスタルジア、という 3 つに分けている。F.デーヴィス著、間場寿一ほか訳『ノスタルジアの社会学』、京都：世界思想社、1990 年。

七、おわりに

本論文では、金関丈夫が執筆した「龍山寺の曹老人」シリーズのうち、戦後に発表された「百貨店の曹老人」、「幽靈屋敷」、「観音利生記」三作品の分析を行った。

「百貨店の曹老人」は、他の作品と異なり曹老人が龍山寺を離れ、台北の中心である「城内」で事件を解決する物語である。当物語では、インドネシアという「外部」（かつ帝国拡大の象徴）よりもたらされた「宝」が、植民地台湾内に存在する「異質な外部」に住む犯罪者によって奪われ、曹老人により取り返され「中心」へ戻るという構造を有している。つまりこの物語において読者は、曹老人の行動を通して、「宝」を獲得するという冒険物語を追体験するのである。金関自身、この物語に時局的意味を持たせようと考えていなかったのかもしれない。しかしながら、「余技」として執筆していた文芸作品であるからこそ、作者金関の「過去」の植民地統治に対する無防備な意識を読み取ることができるのであるとも言えるのである。

「幽靈屋敷」の分析では、物語の構造、および作中で描かれた「關三姑」という台湾の迷信に注目し分析を行った。当作品で金関は「過去と現在」、「文明と非文明」を明確に描き分けている。事件は曹老人の科学的推理によって物語は解決する。しかしながら、迷信であるはずの「關三姑」は、物語の最後であたかも真実であったかのように描かれている。近代化した世界の中で、突如描かれる「迷信」と「過去」、当作品の分析では、当問題にいついてレナート・ロサルドの述べる「帝国主義ノスタルジア」という概念を援用し考察を行った。その結果、金関が当物語で「關三姑」が真実であったかのように描いたのには、彼の失われつつある台湾の旧慣へのノスタルジーと、それを保存・記録するという学者としての冷徹なまなざし――統治者としてのオリエンタリズムが存在したのではないか、という考察を得ることができた。

臺灣大學學術期刊資料庫

最後に「観音利生記」の分析では、物語に描かれた「媳婦仔」という台湾の旧慣が、金関自身の台湾の文化、過去の「皇民化」政策に対する態度と、いかに関わっていたのかに注目し考察を行った。分析の結果、金関は日本統治時代においても人身売買に結びつく「媳婦仔」が無くなること自体に反対をしていなかったこと、さらに台湾人の文化や心を理解しない、急進的な「皇民化」には反対していたことが理解された。そのため、当作品に描かれた金関の台湾人や台湾文化への理解は、基本的に戦前と戦後において大きな変化は見られないということができる。探偵小説を読むことにより、読者は自分たちを不安にさせるものを理解することができる。一方で、当作品に描かれた「不安」とは、すでに「過去」の日本統治時代に存在するものである。そのため、読者は当作品を読むことにより、目の当たりにしている戦後の初期の台湾の政治や社会に対する不安を理解するのではなく、「安定」した「変わらない」過去へのノスタルジーを喚起されられるのだとも言える。つまり、金関丈夫が戦後に発表した「龍山寺の曹老人」シリーズとは、読み物に飢えた読者への「娯楽」であった一方で、結果的にすでに「過去」となった日本統治時代へのノスタルジーを描いた作品であるとも言えるのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

著作

臺北市社會課（1935）『要保護者の生活調査―方面別社會調査―』臺北市社會課

張文環（1941）「藝妲の家」『臺灣文藝』（創刊号）啓文社

江間常吉（1943）「白骨事件」『台湾探偵実話』日本出版配給株式会社台湾支店

林熊生（1943）「信心深い泥棒のこと」『台湾公論』（8月号）台湾公論社

金関丈夫（1980）『南の風』法政大学出版局
F.デーヴィス著、間場寿一ほか訳（1990）『ノスタルジアの社会学』世界思想社。
吉見俊哉（1992）『博覧会の政治学』中公新書
川村湊（1996）『「大東亜民俗学」の虚実』講談社
近藤正巳（1996）『総力戦と台湾－日本植民地崩壊の研究』刀水書房
レナート・ロサルド著、椎名美智訳『文化と真実』（1998）日本エディタースクール出版部
陳惠雯（1999）『查某人地圖』博揚文化
笠井潔（2002）『探偵小説論序説』光文社
中島利郎編（2001）『日本植民地文学精選集 38 船中の殺人／龍山寺の曹老人　第一輯・第二輯』ゆまに書房
坂野徹（2005）『帝国日本と人類学：1884-1952 年』勁草書房
陳柔縉（2005）『台灣西方文明初體驗』麥田出版社
ヴァルター・ベンヤミン著、浅井健二郎編訳（2007）『批評の瞬間：ベンヤミンコレクション（4）』ちくま学芸文庫
顔杏如（2010）『植民地都市台北における日本人の生活文化-「空間と「時間」における移植、変容』東京大学博士論文

臺灣大學圖書館期刊資料庫

論文

螺溪生、蘆山生（1935）「大稻埕の裏街のぞ記」『社会事業の友』（75）臺灣社會事業協會 p.107
池田敏雄（1941）「關三姑」『民俗臺灣』（第一巻第三号）東都書籍 pp.22-24
金関丈夫（1941）「論争の始末（上）」『民俗臺灣』（第一巻第二号）東都書籍 pp.42-43
金関丈夫「民俗への愛」（1941）『民俗臺灣』（第一巻第二号）東都書籍 pp.43-45
楊雲萍「研究と愛」（1941）『民俗臺灣』（第一巻第二号）東都書籍 p.43
T・I（池田敏雄）（1941）「編輯後記」『民俗臺灣』（第一巻第三号）

東都書籍 pp.271-272
吳瀛濤（1942）「祝宴・藝妲・廣場」『文藝台灣』（第四巻第二号）啓文社 p.46
池田敏雄（1943）「台北市艋舺に於ける媳婦仔制度・養女制度」『民俗臺灣』（第三巻第十一号）東都書籍 pp.12-15
張文環（1943）「老娼撲滅論」『民俗臺灣』（第三巻第十一号）東都書籍 p.35
李騰嶽（1943）「媳婦仔と養女」『民俗臺灣』（第三巻第十二号）東都書籍 pp.16-17
台北市役所（1943）「戸口」『台北市統計書』台北市役所 pp.8-9
顔忠賢（1990）『日據時期大稻埕店屋空間的文化形成分析』国立台湾大学修士論文 p.48
宮脇弘幸、百瀬侑子（1990）「南方占領地における日本語普及と日本語教育：日本軍占領下フィリピンとインドネシアの場合（1942－1945）」『成蹊文藝』（130）成蹊大学 p.77
管本康之（1998）「探偵小説、群衆、マルクス主義―平林初之輔の探偵小説論」『日本近代文学』（第 59 集）日本近代文学会 pp.78-79
小熊英二（2001）「金関丈夫と『民俗台湾』－民俗調査と優生政策－」『近代日本の他者像と自画像』柏書房 pp.24-53
中島利郎（2001）「日本統治期台湾の探偵小説」中島利郎編『日本植民地文学精選集 38 船中の殺人／龍山寺の曹老人　第一輯・第二輯』
ゆまに書房 pp.1-7
中島利郎編（2002）「日本統治期台湾探偵小説史稿」『台湾探偵小説集』緑蔭書房 p.390
金関丈夫（2003）「考古学的小説」中島利郎編『日本統治期台湾文学集成 17 台湾随筆集（三）』緑蔭書房 p.205
浦谷一弘（2004）「植民地統治期〈台湾〉の探偵小説―林熊生『龍山寺の曹老人』」『花園大学国文学論究』（32）花園学園大学 pp.57-89
三尾裕子（2006）「植民地下の「グレーゾーン」における「異質化の

臺灣大學學術期刊資料庫

語り」の可能性」『アジア・アフリカ言語文化研究』(71)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 pp.181-203

川端基夫(2009)「戦前・戦中期における百貨店の海外進出とその要因」『経営学論集』(49) 龍谷大学 p.8

星名宏修(2010)「萬華と犯罪－林熊生「指紋」をめぐって」王徳威ほか『帝国主義と文学』研文出版 pp.339-363

横路啓子(2015)「植民地台湾的探偵小説からの逸脱—金関丈夫「龍山寺の曹老人」シリーズを中心に」東アジアと同時代日本語文学フォーラム×光来大学校 GLOBAL 日本研究院編『跨境』笠間書院 pp.47-59

臺灣大學學術期刊資料庫